

座長／国立障害者リハビリテーションセンター／飛松好子

障害者スポーツは競技スポーツからレクリエーションレベルまであり、しかも様々な種目がある。競技レベルとしては、草の根レベルから、国際大会まで健常者と同じようなランクがあり、その最高峰がパラリンピック大会である。歴史的には第2次世界大戦（1939-1945）で負傷した脊髄損傷者が多数にのぼり、そのリハビリテーションの一環としてスポーツを取り入れたことから始まる。2008年北京大会から両方開催することが義務となった。

障害者スポーツは健常者のそれと同様多様である。障害者がスポーツは健常者スポーツをそのままの形で行うのではなく、障害に配慮した修正が加えられている。また障害が競技の結果に反映することを避けるために、その競技において同等の機能を持つ者同士が競い合えるように「クラス分け」が行われる。

このようなことから障害者スポーツはなじみの薄い人々にとってわかりづらいものになっている可能性がある。そこでこのシンポジウムでは「走る」、「跳ぶ」、「投げる」といった解りやすい競技である陸上競技を取り上げ、パラ陸上競技における医科学の関わりをテーマとして、討論をすることとした。

パラ陸上競技の紹介を日本パラ陸上競技連盟理事の指宿立先生にお願いした。先生はパラ陸上競技における安全性の確保と障害の補完、適応の具体例を紹介した。たとえば、視覚障害者の競技において位置情報や周囲状況を知らせる伴走者や方向を示すコーラーが認められていること、投擲種目では座位で投擲する種目があることや、その座への乗り移りを解除するアシスタントが認められていることなどである。トラック競技では、障害の代償として、車椅子レースや義足を用いてのトラックやフィールド競技があり、車椅子や走行用義足の改良もあって年々競技レベルが向上しており、メダル獲得のためにも医科学支援が必須であることを述べた。

山口高司先生はオーエックスエンジニアリング株式会社で長年レース用車椅子の開発に携わってきた。1964年の東京パラリンピックの時には日本選手は日常生活用の車椅子で参加したが、その後レース用車椅子は時代とともに発展してきた。車軸の位置、座の形状、深さ、足の置き場、車輪、前輪の大きさ、車輪間距離やハンドル操作法、全体の重さなど、「勝てる車椅子」はどういうものかについて解説した。

樋口幸治先生は運動生理が専門である。日本パラ陸上競技連盟車椅子部門強化委員、上級コーチを務め、日本障害者スポーツ学会理事でもある。また本学会学術委員会リハビリテーション部会、部員でもあり、本学会の研究費助成を受けて頸髄損傷アスリートの車椅子のバケットシート（レース用車椅子においては体幹、座位、下肢の収納とバランスを保持する部分）の開発と頸髄損傷者の病態を理解した合理的なトレーニング方法の開発と選手強化を行ってきた。本シンポジウムではその経験と研究成果を発表した。頸髄損傷者はトラック競技に車椅子を必要とすると同時に車椅子駆動にも障害を有する四肢麻痺者である。障害を悪化させず、記録向上を目指す訓練等に関する発表を行った。

飛松好子は障害者スポーツの参加要件とクラス分けに関する発表を行い、医科学の必要性を述べた。日本のパラ陸上競技のクラス分けは日本パラ陸上競技連盟が行っており、IPCのクラス分けに準拠している。指宿立先生は国際クラス分け委員であり、国際的にも活躍しておられるがこの度は飛松好子がパラ陸上競技の紹介をした。日本パラ陸上競技連盟は国内ルールとして国際大会ではeligibleではない障害者のクラスを付加している。これをローカルルールと呼ぶ。競技者を増やし、裾野を広げる上でも必要なことである。

シンポジウムでは、国際動向や、レース用車椅子の構造に関する踏み込んだ議論も行われ、実り多いシンポジウムであった。